

2017年12月8日 第3225回例会

於： 横須賀商工会議所



<点鐘・開会> 18:30 小林 会長

<斉 唱> 「手に手つないで」

<会 長 報 告> *ガバナー事務所より

・RI第2780地区2020-2021年度地区ガバナー・ノミニー候補者告知の件について

候補者：久保田英男君（鎌倉RC）対抗候補者がある場合は

12月14日(木)正午まで

昭和35年11月20日生 職業・役職：株式会社豊島屋 常務取締役

2005年9月 鎌倉RC入会 2014-15年度 鎌倉RC会長

2015-16年度 第2グループガバナー補佐

<委員長報告> *ローターアクト委員会小山委員長より第29回ローターアクト年次大会報告

<幹事報告> *例会休会のご案内

・12月29日及び1月5日は定款による休会

<出席報告> *出席委員会 植田委員長より12月8日の出席報告

会 員 数	出席対象者数	出 席 数	欠 席 数	メイクアップ数	出 席 率
114名	96名	57名	39名	8名	67.71%

<ニコニコ報告>

・白 井、高橋 両会員 誕生月祝いとして

・長 坂 会員 入会月祝いとして

・三 役 鹿島会員、本日の卓話楽しみにしております。

・山 口、角 井、井 苺、波 島、谷、高橋、八 巻、前 川、岩 瀬、
若麻績、薦 野、福 西、北 村、鈴木、杉 山、吉田、高橋、澤 田、
根 岸、勝 間、小 沢、小佐野、Enora、田 邊、関 口、長 坂、上 林 各会員
鹿島会員、本日の卓話楽しみにしております。よろしく願いいたします。

・鹿 島 会員 本日は「世界の歴史から学ぶ大学再建」というテーマでお話しさせていただきます。

・三 役 年忘れ家族会、多数の参加申し込みありがとうございます。また、ビンゴの景品のご提供ありがとうございます。まだまだ景品は受け付けています。

・三 役 クラシックジャパンラリーへ応援に来ていただいた皆様、早朝からありがとうございます。

・瀬 戸 会員 先週の土曜日、「クラシックジャパンラリー」が開催されました。応援に駆けつけてくださいました会員の皆様ありがとうございます。1台2億円のクラシックカーもありました。

・藤原3番テーブルサブマスター 12月4日、「あら井」にて3番テーブルミーティングを開催させていただきました。小林会長、岡田副会長、ご出席くださりありがとうございました。高橋さん、美味しいお料理と行き届いたサービスありがとうございました。

・鈴木、江 沢、福 西、小佐野、池 上 各会員 12月4日あら井にて3番テーブルミーティングを盛大に開催しました。当日は宮島TM、藤原SMにより、又、小林会長、岡田副会長にもお越し頂き盛り上がりました。高橋仁子会員、とても美味しかったです。

・藤原3番テーブルサブマスター 3番テーブルミーティング(12/4)の席上、福西会員の御配慮で渡辺パストガバナーのためのお花を飾っていただきました。ありがとうございました。

・加藤 会員 週末は本当に寒くなるようです。それでも明日、釣りに行きます。皆様風邪に注意しましょう！

皆さん今晚は、本日は宜しくお願いたします。

5年前、前市長の吉田雄人氏と食事をしました時、“鹿島さん、横須賀市役所の90%の人が神奈川歯科大学はもう駄目だ、横須賀から大学が一つ消滅すると思っていましたよ”と言われました。8年前の本学の状況については、ここにおられる地元の皆さんは、マスコミ報道を通して良くご存知の事であろうかと思えます。私はその問題の生じた2010年に理事長になったというよりも、させられました。能力とか人望等は全く関係なく、叩いて出るホコリの量を尺度に消去法でいったら最後に私が残っただけの話でございます。この会には、若い起業家や会社経営者の方々もおられますので、どのような手法で瀕死の組織を再建したのか、私独自の再建方程式をかいつままでお話させていただきます。新病院紹介や健康の話よりも、皆さんが最も興味のある所であろうかと思えます。

「無常という事」の書で著名な歴史評論家であった小林秀雄は、「歴史は現代史であり、範例の宝庫である歴史から今を学ぶ」と述べています。つまり、過去を遡ることによって今が解るというのです。そこで、第一次世界大戦後の荒廃した世情から台頭してきた、ファシズム政権樹立のプロセスを参考にした本学再建への取り組みについてお話いたします。

第一次世界大戦後、ドイツは全ての植民地を失い、ベルサイユ条約により多額の賠償金を課せられました。そこに世界大恐慌が追い打ちをかけ、国民の50%以上は職を失い、経済は疲弊していくことになります。国民は夢と希望を失い、ネガティブ思考の中、疑心暗鬼の日々を過ごしていたに違いありません。それは、規模の違いはあるものの、かつて本学の置かれていた状況に酷似していました。国全体が何らかの新しき変化を期待している時、間隙を突いてナチスが表舞台に出てくることになります。今回は、**ガバナンス**、**将来ビジョン**、**財政**、**イデオロギー**そして**象徴**のキーワードでナチス政権樹立と本学再建プロセスとを対比させてご説明いたします。

ナチスの**ガバナンス**は、ゲシュタポによる反対制派の弾圧であり、いわゆる秘密裏に行われた力の支配でした。それに対し本学は、父母会、同窓会、組合への情報公開や教職員を対象とした全体説明会そして教職員と執行部との合同勉強会を通じた真実の共有といえます。しかし、再建成功の主因となったのは、「報酬は改革成功という名の達成感」のフレーズで公募した大学再建プロジェクトチームの立ち上げでした。疑心暗鬼の中、不平や不満が累積し、爆発寸前のエネルギーの塊を大学再建へと誘導したことが、改革成功の鍵となったことは言うまでもありません。個人や一組織ではなく、大学全体が一つの生命体と化し、そこから創発してきた目に見えない総合力がガバナンスとして働いたことを今でも実感します。

ナチスの**将来ビジョン**は、全ヨーロッパ征服であり、エゴイズムをむき出しにした大ドイツ帝国の確立でした。本学の将来ビジョンは、未来につながる財政基盤の確立、貢献が報われ誇りある労働環境、歯科を中核としたグローバルな教育研究そして国内外のニーズに応える高度先進医療の4本柱を基軸とする健康長寿社会を支えるプロフェッショナル組織です。しかもこの将来ビジョンは、若き力を結集した再建プロジェクトチームから発せられたものでした。そこにはナチスと異なり、正義と大義に基づいた基本的人権の尊重を瞥見することができます。

当時のドイツ**財政**は行き詰まり、究極の選択として、賠償金1320億マルクを金で支払うベルサイユ条約を一方向的に破棄しました。借金が消えたことにより、国民は一時的に安堵したものの、そこに大義名分は立



たず単なる錯覚に過ぎませんでした。一方、本学は改革一年目から年間10億円以上の赤字からのV字回復を模索しました。時間的猶予はなく、復旧と復興を同時に推し進めなければならない実状から、その年の冬期賞与の支給停止を決断しました。さらに不採算部門の廃科・閉校に踏み切り、対象となった部門の教員は退職を勧告することにしました。厳しい決断であり、未だ万感胸に迫る改革として心に残っています。さらに、予算執行状況を確認しながら各種職務手当の支給停止、コスト削減、予算執行停止等の対応策を打ち出し、当初の目的を達成することができました。この黒字化は再建の可能性を数字として視覚化させました。大義という名のもとに掴んだ勝利といえます。

当時のドイツ国民の**イデオロギー**とはいかなるものだったのでしょうか。一般的に、憎しみは団結を生み愛情は分裂を生ずと云います。憎悪の念を共有することによって、その組織は団結するという人間の心理を突いた考えに基づいているのでしょうか。ナチスはユダヤ人をその対象に選択しました。「アンネの日記」や映画化された「シンドラーのリスト」等で、世界中の誰もが知っているホロコーストです。第一次世界大戦後のドイツと当時の本学とのイデオロギーの違いを対比させることには少々無理があるかもしれません。敢えて挙げるとすれば、資産回収を目的とした旧理事・監事の善管注意義務違反に基づく損害賠償の民事裁判であるかもしれません。通帳はもとより自宅、マンション等の闇討ち的差し押さえは、未だに例えようのない感佩を覚えます。しかしながら私自身、この件についての後悔や懺悔の気持ちは全くありません。

ナチスの**象徴**は忠誠を誓う独特の敬礼様式（両足を揃え片手を伸ばす）と党旗のシンボルマークであるハーケンクロイツ（鉤十字）です。力による統制と服従の象徴であり、それには狂信的でカルト的ともいえる一種の違和感を覚えます。本学は、100年に渡る悠久の時をかけて創り上げてきた文化力の象徴として「人体標本と100年史」と題した歴史資料館を開設しました。それは、大学の品格と歴史、卒業生間の絆、在学生の母校愛、教職員の帰属意識そして外交手段としての象徴となり普遍です。

第一次世界大戦後のドイツは復興に失敗し、本学は復旧と復興を少なからずとも同時に成し遂げました。成否の分かれ目は、選択した手法に正義と大義が有るか無いかの違いに他なりません。しかしながら、綺麗事のみで全てが上手く行くとは限りません。“目的のためには手段を選ばないマキャヴェリズムと大義・道義を重んじる論語”、“清濁併せ呑みかつ清波漂う”、“嘘の皮を被って真を貫けばそれで良しとする”、これらのフレーズは何事もバランスが重要であることを意味します。私自身もそれらの使い分けを十分に学び、経験し、そして実行して参りました。

それは、目的達成のために自分の力の限りを尽くした後は、いかなる結果が待ち受けていようとも、それを自分の宿命として素直に受け入れる“幕煩悩”の覚悟が最も大切であることを学んだ期間でもありました。まさに、風に舞う夢が如きの8年間でしたが、未だ破顔一笑するに至っておりません。私の経験が、お集まりの若い起業家の方々に対して何らかのお役に立てば幸いです。

<閉 会> 19:30 小林 会長

週報担当 西村 京子